

2011 年度、がん化学療法センター研究発表会 開催される

日時： 2011 年 4 月 15 日 (金)、8:50 ~ 17:00

場所： がん研吉田講堂

2011 年度のがん化学療法センター構成員による研究発表会が執り行われ、制限時間内に各研究部、各人、自由な形で研究・技術発表が効果的に行なわれた。2 年目になって発表会の目標が理解されてきた。発表会の目的、実施方式は以下のような原則で、相互交流を目的としている。

目 的

各自が、研究を化療全体に説明する
各自が、化療全体の研究を理解する
所員の相互理解と連携を促進する
新人とセンターが相互に紹介しあう

原 則

研究・実験を行っている人達が発表する
出来るだけ多く、新人も発表する
化療センターの行事とし、非公開とする
参加者は自動的に秘密保持契約者とする



発表会の概要は、2 人による発表会印象記によくまとめられているので、お読みいただきたい。

化療センター発表会印象記 (1)

基礎研究部 大原智子

2011 年 4 月 15 日に第 2 回がん化学療法センター発表会を吉田講堂にて行いました。大震災の日から一ヶ月経ってはいましたが、まだまだ非日常的な気配の漂う中での開催となりました。

化学療法センターでは、研究員持ち回りによる化療センター発表会やジャーナルクラブなど、さまざまな規模のミーティングを行っていますが、新年度のはじめは、「研究に携わっている全員がプレゼンテーションをする」化療センター総出の発表会となりました。4 月はそれぞれの研究室に新人を迎える時期でもありますし、ちょうどお互いの顔ぶれや得意分野を知り合うよい機会でした。

当日の準備は「スライドのセットアップは 8 時半までに」と日頃のラボの活動からするとちょっと早めの設定でした。そこには自ずと「特別な日」という緊張感が生まれ、ある意味発表以上のプレッシャーもありました。8 時 50 分には藤田先生の司会によって開会となり、吉田所長のご挨拶からいよいよ始まりです。思えば、一昨年秋に吉田先生が所長に着任され、次の春に最初の発表会が行われたのでした。初めて発表会の話を知った時は、夏のがん研発表会とは別の企画ということに、吉田所長への自己紹介のような意識を持っていたのですが、昨年の開会の時の「それでは第 1 回化療センター発表会を始めます」という藤田先生の言葉を耳にして、「…第 1 回…？」と聞き返してしまいそうになったのを思い出しました。そしてやはり、第 2 回が行われる運びとなりました。



各部共、持ち時間は 1 時間という決まりのなかで、発表と質疑応答を行います。演者の人数もテーマの持ち方も違っているので、学会発表のように一人ずつ発表と質疑応答を行っていく部もあれば、大きなテーマのもとに数人が発表した後、まとめて質問を受ける形式をとるなど、持ち時間内の配分は各部に任されていました。それだけに限られた時間のなかで話の流れを判りやすく

する工夫が凝らされ、どの部も統一感のあるまとまった発表という印象でした。質疑応答も活発に行われましたが、各部長先生の司会のもと、制限時間厳守で会は粛々と進行していきました。

がん化学療法センターには 5 つの部があります。分子標的薬の研究開発に関する研究という基本は

同じですが、それぞれのアプローチ方法や視点は全く異なっています。その全ての話を一日で伺うというスケジュールに、5 時間目が終わるころにはかなりの充実感と多少の疲労感に包まれることとなりました。発表会の終わりには新人紹介の時間が設けられていました。これまでの研究の話をする人や、にこやかに自己紹介をする人などが入れ替わり立ち替わり演壇に上がります。彼らの新鮮な緊張感と、発表が終わってほっとしている聴衆の間に、暖かい空気が流れた 1 時間でした。

そして最後に、吉田所長より「去年の発表から一年たって面白い展開がみえた人もいたし、苦労が伺える人もいる」というコメントが為され、みなそれぞれの一年を振り返ると共に、背中を押してもらったような気持ちで発表会が終わりました。

さて、長い発表会の後は長い(ことになる)懇親会の始まりです。会場を講堂から研究室そばの会議室に移し、気分も一新です。みんなが発表会のことで頭がいっぱいになっている間に、所長室の方がしっかりと準備をしてくださっているというのは、本当にありがたいことです。ふんだなお酒と料理に囲まれて話もはずみ、あっと言う間に夜は更けていきました。あとでスナップ写真を見たときに、みんながだんだんリラックスした顔になっていくのがよく判りました。そして、最後には大笑いしています…が、何がおかしかったのかはよく思い出せません…酔っぱらいにありがちなことです。



翌日には懇親会のおこぼれをありがたくお腹に納めて、今年の化療センター発表会も全て終わりです。新人の学生さんから「昨日のような会はよくあるのですか。とても楽しかったです。」と言われて、改めて「この時期にやってよかったな」と思いました。発表会自体は気が重い人も多いと思いますが、楽しい懇親会も発表会があればこそ…。日頃のデータの検討を研究室内のディスカッションレベルでしか考えないことが多い身としては、自分のテーマの背景などの

情報にも敏感になると共に、理解されやすい話をする工夫を心がけなくては、という自戒と共に今年一年を頑張ろうと思えた次第です。

化療センター発表会印象記 (2)

分子生物治療部 馬島哲夫

平成23年度の化学療法センター研究発表会が、さる4月15日に吉田講堂にて行われました。昨年、第1回が開催され、今回が2度目の会になります。昨年まで米国留学していた私にとっては、今回が初めて参加であり、私が不在であった2年間の間に化療センターにおける研究がどのように展開、進展したかを知る良い機会と、大きな期待と興味をもって参加しました。

発表会は、臨床部よりスタートしました。臨床検体を研究材料として、より臨床での診断・治療に直接に役に立つことを意識した研究が、バイオイメージング技術を背景として展開され、非常に印象的でした。とくに臨床で日々忙しい先生方が、その合間に力強く研究を進められている姿に改めてたいへん刺激を受けました。臨床部は私のラボと隣であることもあり、湯浅先生や三嶋先生などに研究その他においてたいへんお世話になっています。今回の発表で三嶋先生が数ヶ月前に私のお渡しした前立腺がん細胞株を用いて出されたデータは非常に興味をもって聞きました。つづく分子薬理部では、全薬工業と



ともに共同開発され、今年米国での第一相臨床試験がスタートした PI3 キナーゼ阻害剤 ZSTK474 を中心とする研究が発表されました。この研究は、その立ち上げに多くの苦労をされながら15年以上にわたり同研究部が進めてこられたがん細胞パネルを軸とした研究の成果であり、「ぶれずにやってきた」という矢守部長のプライドとヒストリーをこめた言葉がひとつの格言のように感じられました。さらに、ZSTK474 の大きな流れに加え、ゴルジ

阻害剤など新しい切り口での研究は今回はじめて聞く話であり新鮮でした。午前最後のセッションが私

の所属する分子治療部でした。当研究部では、テロメアとその関連因子を研究の軸としつつ、臓器別がんプロジェクトとして5年前にスタートした内分泌がんの研究を新しい視点に加え研究を進めています。今回の発表では、大石、平島両研究員のここ1年での研究の進展が目立ったのではないかと感じます。また私が岡部研究助手とともに留学前に立ち上げて進めてきたアンドロゲン受容体阻害剤探索系が、支援活動という形で生きていることをうれしく思いました。私自身は留学先において、がんのアキレス腱因子の体系的探索システムを目の当たりにし、「がんを選択的にたたくための合理的な標的因子を探索する新しい系の構築を目指す研究」が化療センターのひとつの流れとしてあってもよいのではないかと考え、がん幹細胞を材料としてこれを開始しています。まだまだ道半ばですが、ラボの他のテーマとの関連においてもばらばらになるのではなく、有機的に結びつく形で今後進めていけたらと思います。

午後のセッションではまず、ゲノム研究部の発表がありました。テーマの中心であるがん微小環境は、私の現在の研究とも接点が多く、興味深く聞きました。とくに、富田部長・斉藤研究員のおこなっている遺伝子発現解析情報にもとづく *in silico* での阻害剤探索の方法論については、ゲノム研究部内のテーマにとどまらず、共同研究により他の研究にも活かせるのではないかと感じました。また、築茂研究員の翻訳調節機構の研究に基礎的な発見という点で興味をもちました。研究部のなかで最後の発表となった基礎研究部では、がん転移を引き起こす原因因子として同定されたアグラスおよび Merm1 に関する研究成果が発表されました。探索研究が精力的に進んでいるようで、治療薬創製への今後の展望を期待させるものでした。とくに高木研究員が膨大な仕事を明るく爽やかにこなす姿にすがすがしさを感じました。また質疑応答の中では、藤田部長の「なにがなんでも前進するんだ」という馬力をかんじ、よい刺激を受けました。

各部の発表やその質疑応答の全体を通じ、まず吉田所長の的確なアドバイスをふくむ 数々のコメントに、そのつど頷かされ、また考えさせられました。「その因子は分子標的として本当に妥当か、差があまり大きくないがだいじょうぶかい？」といった類いのフランクなコメントは、基礎研究だけでなく製薬企業の研究を牽引されてこられた経験に基づくものではないかと推測します。データとして一貫性があるという基礎研究を進める上での要件だけでなく、実際に治療に役に立つ研究という視点にたったときに、どうなのか、大丈夫かまだまだ不安があるのか、といったことを常に考えていく必要があることを改めて考えさせられました。また「研究の時間軸を示してほしい」というコメントもありました。これは、研究を進める上で、目的をつねにクリアーにしてたえず進んでいる方向を確認してすすむべきで、漫然と進めるのではなく着実な前進が得られるように timeline を頭の中で描きつつ進めるべきである、ということと私の中では理解しています。



今回の発表会では、また、普段きくことのできない研究助手の方々の話をきくことができ、大変有意義であったと思います。研究助手の方々それぞれにエキスパートの仕事(動物実験、専門性を要する機械のとりあつかいなど)を持っていることがよくわかりました。私が昨年まで留学していた研究所では、FACS ソーティング、Gene Chip、動物実験など大掛かりな機械ないしは技術を要する仕事はすべてファシリティーになっていて、各部署に専属テクニシャンがあり、各研究者は DNA、RNA、細胞のサンプルを出すだけであとの操作をすべてやってもらえるというシステムでした。このようなシステムは大規模研究所でなくては実現が難しく、実際、現在の化療センターでは各研究者それぞれが自分で機械の立ち上げから最後まで全ての実験をやるという形です。このような場合、研究所内にそれぞれの機械あるいは専門性の高い実験に精通する研究助手ないし研究員がいることが必須であり、まただれが(どこの部が)何にくわしいのかという情報をみながシェアしている必要があると思います。化療発表会のような場はその目的で大変有効だと思います。今回はさらに、すでに所属している学生や新しく参画したポスドク、学生の発表もありました。これによって、化療センターのなかで、だれがどのような background をもち、どのような研究をしているかがわかりました。実際、私の部でも、発表会の後、自分のやっている仕事に必要な機械を使っている人が他の部にいることを知り、すぐに聞きにいった人もいます。このように、部の垣根をこえた交流、情報交換は、共同研究など研究の幅を広げるのに(また出会いの場としても?)有効であると思いました。逆に言うと、日常でありお互いに顔を合わせる機会

がないということでもあります。昨年まで私の所属していた Broad Institute では、カフェラウンジ(化療セのある4階でいうとリフレッシュコーナーのようなところ)があり、無料コーヒーが置いてありました。必然的に研究の合間にコーヒーを飲み立ち寄り、そこで別の部のポスドク同士が顔をあわせることもありました。また、ウイルス実験用培養室が部をこえて共通であったので、そこで他の部のメンバーと自然と顔を合わせました。このような部をこえた人の中での交流が自然に生じるよう、化療センター内の日常生活の導線がすこし変わるとよいのかなとも思います。

発表会全体を通じた印象として、各部ともテーマがしっかりまとまっているという印象です。他方、部と部の間での共同研究がもう少しあってよいような印象も受けました。また培養細胞を用いた基礎研究で得られた成果の実際の臨床がんにおける関連性といった点も重要なところであり、基礎と臨床(PhDとMD)の連携の強化もさらに必要かと思います。そのような部分も意識しつつ、これからまた新たな1年間、仕事を進めていきたいと思います。